兎も走るキャンパスで
――国際中世学会参加の記

奥　田　宏　子

イギリスのリーズ大学国際中世研究所が主催する国際中世学会に出席した。ロンドンから北へ列車で2時間半のリーズ市で7月初旬の数日間、世界各国からの中世学研究者と有意義な情報交換の場をもった。分科会数、発表者数、いずれもきわめて多い大規模な学会だった。

分科会がカバーする領域は、学会の性質上、時代としてすべて中世に属し、政治経済は言うに及ばず、宗教、美術、聖書学、教会史、民俗学、聖人研究、アラブ研究、文学および言語、典礼研究、古文書学、修道院研究、科学、神学、などなど、多岐にわたる。このような広い分野を包含する学会には、他にないメリットがある。いわゆる学際的な視点から、狭い専門領域を大きく出て、中世という時代を立体的に捉え、また鳥瞰できる点だ。これは汎ヨーロッパ性が殊のほか強い欧州中世を研究対象とする場合、必然的な視点である。私の専門は中世文学・演劇だが、今回の学会では文学プロパーというよりも、おかげでその周辺領域の研究に触れることができた。

歴史的に一区切りのミレニアム年にふさわしく、今年の中心テーマは、「時間」や「永遠」。従来の固定的な専攻分類や枠組にとらわれることなく、「時」そして「永遠」について、自由に柔軟に探索し意見交換ができた。幾多の専門分野を大きくカバーする学会ならこそである。

一例として、第一日目の分科会「時と永遠の探求」では、中世における「永遠」観が、哲学者、ビザンチン文化研究者、思想史家、美術史家などによって、まったく異なる角度から分析された。ペーパー発表につづいて、質疑応答、参加者との意見の交換が必ずある。個々の研究者が通常は接触のない分野の専門家と同じテーマのもとに情報交換できる得がたい機会である。

「時」また「時間」は私の関与する中世演劇の研究にとっても重要なテーマだ。2日目の分科会「イギリス演劇における劇的時間」は、実際の上演での「時間の経過」と作品に流れる「時間観念」とを、中世劇を例に丹念に考察した。一方に、演技者の台詞のなかで言及される特定的な「時間」があり、他方に、ジャンルとしての中世劇の主軸を成す「人類の歴史」をめぐる想念としての「時間」がある。これらの二つの時間はどのように交叉しているか。加えて、人間の創造と最後の審判までを「神の意図」として劇化する中世（宗教）演劇においては、ヨコ軸状の人間時間の中に、人類の救済という「永遠のテーマ」がタテ軸として切り込んでくる。中世劇の「時間」相は複雑である。

7月初旬のリーズは肌寒いと出発前に教えてく

れた人がいたので、秋のコートを一枚持って行った。着いた日の夜、部屋に暖房が入ってホッとするほどの時ならぬ寒さにおかげで何とか対処できた。そして翌朝、薄く朝モヤのかかる緑のキャンパスを、兎が二匹駆け抜けるのを見た。のどかな風景だった。満載のスケジュールをこなして一日を終え、夕食をとることには、連鎖状に繋がる研究テーマに圧倒されて頭のなかはいっぱいだ。でも、開けてきた水平線の、さらにその向こうにあるものに出会いたい願いで、心はだんだん元気になってくる、そんな有意義なリーズ行きであった。